

# 秋葉蔵版『金光明最勝王経』 近世秋葉信仰と總持寺

著者	武井 慎悟
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	26
ページ	41-77
発行年	2021-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1646/00000892/">http://id.nii.ac.jp/1646/00000892/</a>



## 秋葉蔵版『金光明最勝王経』

— 近世秋葉信仰と總持寺 —

武井 慎悟

### 一、問題の所在

二〇一九年六月十九日から二十一日にかけて行われた、鶴見大学仏教文化研究所による、總持寺祖院における典籍調査の中で、秋葉蔵版『金光明最勝王経』（以下、『秋葉蔵版』と略称）、十冊一結の所蔵が確認された。わが国において『金光明経』諸本は、鎮護国家の目的で盛んに読誦されたことで知られるが、『秋葉蔵版』は近世中期に開版されたものである。本稿は、この経典が披見されたことに因み、主に本経と近世の總持寺および秋葉信仰とのかかわりについて、以下の三つの視点から報告を行うものである。

一つ目は、『金光明最勝王経』（以下、『最勝王経』と略称）を主題とする経典研究の視点である。これに先立って、主に佐伯「金光明最勝王経の思想と流伝」を参照して、『最勝王経』についての概略を述べてみたい。『最勝王経』の原典は、四世紀ころの成立と考えられている『スヴァルナ・プラバーサ・ストトラ』とされる。漢訳は五種あったと伝えられ、その内の『最勝王経』は、旧訳本『金光明経』を分量的に増やしただけでなく、陀羅尼を多く採用することで密教的要素を強めたものである。よって、本稿で扱う『秋葉蔵版』は、唐の義浄が長安三年（七〇三）に訳出した、

新訳にあたるものが基礎にある。佐伯は、『最勝王経』が五世紀初頭には中国に招来・訳出され、中央アジアの諸言語に訳され、アジア広域で広まったことを鑑みれば、大乘経典の中で頗る重要な意義を持つ経典であることを指摘してゐる〔佐伯 110113〕。

わが国における、文献上の『金光明経』諸本受容の初見は天武朝であったとされるが、摂津四天王寺の創建の背景から六世紀後半には伝来していたと推測されるという。しかし、本格的な受容は天武朝以降であって、正月に『金光明経』諸本の読誦が諸国に義務付けられるなど、本経の重要性が徐々に高まっていた。除災招福・鎮護国家を旨とする『金光明経』諸本の思想は、天平年間の国分二寺建立と大仏造立の二大事業として収束した。その後、平安時代に入り、密教修法による鎮護国家の祈願が行われるようになって、『金光明経』諸本は鎮護国家の経典として重視され続けた。また、奈良時代後半以降、『金光明経』諸本の中心的な思想の一つである、懺悔滅罪を主とした悔過法要が各寺院で行われるようになった。さらに、『最勝王経』の長者子流水品を典拠とする放生儀礼などが行われ、広く民間にも受け入れられた。

翻って、『最勝王経』に関する研究では、思想研究や注釈研究が多くみられる。また、わが国での『金光明経』諸本の受容・展開や、これに関わる仏教儀礼に関する研究は古代を中心とした時代設定が目立つ。そうした前提がある中で、本稿では祖院蔵『秋葉蔵版』と、これに関わる近世の宗教実態の一端を明らかにしたい。これによって、『最勝王経』の研究において、周縁的な視点ではあるが、有益な事例を提示できるものと考ええる。また、経典を単なる文献学上のみ配置するのではなく、実際の信仰に紐付けた実態研究を試みる。こうすることで、『最勝王経』研究の中でも、違った視角からの成果を呈示できると考える。

二つ目の視点として、『秋葉蔵版』と近世總持寺の関係を考えてみたい。そもそも『秋葉蔵版』は、瑞雲院という地方寺院から總持寺（具体的には五院内の普蔵院）に奉納されたものである。本経が奉納された背景を探ることで、近世

の總持寺を取り巻く地方寺院との関係性や、当時の山内の動きなどが具体的に可視化できる可能性がある。

總持寺が中期からどのように展開してきたかについては、曹洞宗内を中心に研究の蓄積がみられる。近世曹洞宗の運営形態については、横関『洞門政要』に詳しい。また、室峰編『總持寺誌』や栗山『嶽山史論』は、總持寺についての基本的なことがらが網羅されている。特に、近世總持寺の運営形態については、『總持寺誌』によくまとめられており、どのような形で本山運営がなされていたかが具体的に示されている。これによれば、近世總持寺が五院を中心とした、極めてシステマティックな寺院運営を行っていたことが把握される。しかし、全体の運営方法は詳述されるものの、当然ながら個々の地方寺院と總持寺がいかなるつながりを持っていたかまでは記述されない。本稿は、奉納された経本を通して、近世總持寺と地方寺院（ここでは、遠州瑞雲院）とのかかわりが見いだせる個別具体的な事例を報告するものである。本経がいかなる理由で瑞雲院から普蔵院に奉納されたかを探ることで、近世總持寺の歴史の一端に光を当てることを試みる。

最後に、三つ目の視点として、本経が秋葉蔵版であることにちなみ、『秋葉蔵版』と秋葉信仰とのかかわりに注目したい。秋葉信仰とは、遠江国北部（現・静岡県浜松市天竜区春野町領家）に位置する秋葉山への種々の信仰を指す。その主尊と考えられた秋葉権現は火防の神として、主に近世期を通じて、火災の多い都市部をはじめ全国的に信仰されてきた。山岳信仰研究において、各地の地方靈山に関する研究成果は着実に積み上げられている。そのような中で、秋葉信仰に関するまとまった研究は数少ないものの、主に歴史学、民俗学分野などから各論的に報告がなされ、各地方の市町村史においても成果が見られる。

また、先行研究においては、仏教宗派的な見地に絞った論考は見られないが、曹洞宗を中心に天台宗・真言宗の中で、秋葉権現の勧請が多いことが言及されている「田村監修 一九九八」。秋葉山は、当初真言系の修験に属していたと考えられているが、寛永二年（一六二五）に曹洞宗に帰属している。その影響からか、現在でも秋葉権現を祀る寺院の

多くは曹洞宗である。故に、曹洞宗内からの秋葉信仰研究も存在する。主に、吉田俊英や渡部正英がその面を担ってきたが、これまでの秋葉信仰の研究史上において、秋葉信仰が仏教、特に曹洞宗とは不可分の歴史的展開がなされてきたにもかかわらず、仏教を主とする視点からなされた研究がまだ薄い点は留意してよい。秋葉信仰の包括的理解のためには、仏教を主とするアプローチは必須であるにもかかわらず、秋葉信仰にかかわる経典や思想といった部分は、どの領域からも研究が進んでいない。このような中で、『秋葉蔵版』の研究は、秋葉信仰への仏教民俗学・仏教歴史学的な考究の可能性を拡張すると考える。

以上のような複合的な観点から、本稿ではまず、近世版本、總持寺祖院蔵『秋葉蔵版』の書誌情報を整理する。次に、總持寺と瑞雲院の關係に焦点をあて、本経伝来の背景について考察する。その後、本経のもう一つの特徴である、秋葉信仰とのかかわりについて述べる。具体的には、本経出版に至る背景を分析し、秋葉信仰を中心とした『最勝王経』をめぐる近世の宗教実態について言及する。最後に、本稿をまとめ、併せて總持寺と近世秋葉信仰のかかわりについて若干の指摘と今後の研究課題を提示したい。

## 二、總持寺祖院蔵『秋葉蔵版』の書誌情報

總持寺祖院蔵『秋葉蔵版』は、十巻一結、完全な形で揃っている。収納箱も完備し、十巻の経本が収まった状態で保存されている。経本自体に虫損などが所々見られるが、全体的な状態は良い。本経は箱書きによれば、文政三年（二八二〇）七月、遠州犬居瑞雲院隨從中によって三宝大荒神の神前に奉納されたことが把握される。以下、基本的な書誌情報をまとめる。なお、画像や特殊な意匠、梵字などが用いられた箇所と言及する場合、当該箇所における経本の図を適宜付した。これらの図は特に断りのない限り、すべて總持寺祖院蔵『秋葉蔵版』を用いている。

## A 形状

装丁は折本装本。体裁は版本（木版刷り）。表紙（縦二七・八cm×横八・六cm）は、紺紙に黒の唐草文様で裝飾される。表紙の形状は、羽板に包表紙である。各卷下辺小口に卷数に対応して「壹」「貳」「虚空」「三」「四」「五」「金勝」「六」「七」「雷多」「八」「吉」「九」「十」と書き込まれている。これは本経が、表紙が見えず、重なつた状態で箱に納められて保管されているため、その都度経本を取り出さずとも、一目で何巻がどこにあるかを明確にするために書き入れたものと思われる。また、卷数のみならず、「虚空」や「金勝」といった文言が付されている場合がある。これは、その巻に該当するチャプターが含まれていることを示すものと考えられる。例えば、五巻であれば、「金勝陀羅尼品」が含まれることを表すものであろう。本経は取り出しやすく、利便性が向上するよう工夫されていることから、總持寺内でよく読誦されていたことが窺われ、なおかつ、特定の巻を利用する頻度が高いがゆえに、そういった巻には内容を示す文言が付されたものと考えられる。少なくとも、本経が奉納された近世後期から、總持寺が横浜に移転する近代まで、あるいは、能登の地で、祖院として再建された近代でも比較的よく読誦された經典であったことが推察される。なお、これと関連して、本経九巻中に新聞紙の一部が折り込まれた状態でも指摘していることも指摘しておく。この新聞紙の一部は、折り込まれた形状から、おそらく包香として使用したものであると思われる。新聞の内容がサラエボ事件を伝えるものであるため、一次大戦直前の一九一四年ごろの法要に本経が使われていた可能性を示している。

## B 外題

三巻・九巻は、題簽が剥がれている。八巻は表紙自体が剥がれ、存在しない。その他の、一巻・二巻・四巻・五巻・六巻・七巻・十巻は、表紙の中央部に題簽（縦一六・二cm×横二・六cm）が貼られている。題簽は、濃紺の紙に双郭で枠が引かれ、外側が金、内側が墨で着色されている。題字は金字で墨の縁取りがなされる。題簽に付された外題は以下の

とおり。

- 一卷 「金光明最勝王經卷第一」
- 二卷 「金光明最勝王經卷第二」
- 四卷 「金光明最勝王經卷第四」
- 五卷 「金光明最勝王經卷第五」
- 六卷 「金光明最勝王經卷第六」
- 七卷 「金光明最勝王經卷第七」
- 十卷 「金光明最勝王經卷第十」

### C 内題

本經第一卷、一折目の表には、宝珠をあしらい、題目が蓮台に乗る図が刷られる(図一)。同じく一折目の裏には、梵字と仮名および「金光明最勝王經」の篆書体、真言の音写を漢字表記したものが刷られている(図二)。

図一：題目



一折目・表 「宝珠」 金光明最勝王經 「蓮台」

図二：梵字等



一折目・裏 (篆書体) 金 光明 最勝 王 經  
 (梵字) ソバダ ハラバ ウタマ アランジャ ソタラン

(音写) 素戰拏 波羅婆 烏路麼 囉惹 素怛纒

その後、本文が開始される。第一巻の内題は以下のとおり。

「金光明最勝王經序品第一」

大唐三藏法師義淨奉 制譯

その他の巻の内題は、以下のとおり。

二巻 「金光明最勝王經 二」

分別三身品第三

三巻 「金光明最勝王經 三」



滅業障品第五」

四卷「金光明最勝王經 四

最淨地陀羅尼品第六」

五卷「金光明最勝王 五

蓮華論讚品第七」

六卷「金光明最勝王經 六

四天王觀察人天品第十一」

七卷「金光明最勝王經 七

無染著陀羅尼品第十三」

八卷「金光明最勝王經 八

大吉祥天女品第十六」

九卷「金光明最勝王經 九

善生王品第二十一」

十卷「金光明最勝王經 十

捨身品第二十六」

D 本文款式

本文の款式は、半丁ごとに四行、一行十七字で構成される。料紙は綺羅摺りである。特徴的なのは、本文余白に蓮華の裝飾が施されている点である。特に本文中の偈文部分<sup>(1)</sup>は、偈文を挟んで、上段・中段・下段にそれぞれ蓮華の装

飾が見られ、ひときわ目をひく。経本自体には、虫損などが所々見られるが、全体的な状態は良い。

本文中は墨で訓点が付される。一部の漢字に対しては仮名訓が、左傍もしくは右傍に付される。例えば「王」という字に対しては「ノウ」という訓がふられる。そのほか、字間の豎点、区切り点が付く。本文中には見られないが、八・九・十巻巻末、各品の漢字に対する注釈部分には、レ点および一二点が用いられている。全体に共通することとして、陀羅尼部分には右傍に総仮名が付されている。

経本本文中に書入れは見られないが、各巻上部余白に、總持寺五院の内、普蔵院の鎮守であった三宝荒神の神前に本経が奉納された旨が記される。また各巻、本文中上部余白もしくは背表紙見返し部分に、遠州犬居瑞雲院随中が奉納元であることが記される。界線は、天地界のみ引かれる。界線は各巻ごとに間隔が微妙に異なっている。各巻の界線の間隔および、各巻上部に付される奉納先を表す文言は以下のとおりである。

一巻(天頭 三・五 cm・本文 二二・七 cm・地脚 一・八 cm)

一折目裏から、上部に半折ごとに一文字ずつ記載あり。

「奉納普蔵院三寶大荒神廣前常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州犬居瑞雲院随從中寄附」

二巻(天頭三・五 cm・本文二二・七 cm・地脚一・八 cm)

一折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納三寶大荒神尊前普蔵院常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州犬居瑞雲院随從中寄附」

三卷(天頭三・二cm・本文二・二・四cm・地脚二・二cm)

一折目表から、上部に半折ごとに一文字ずつ記載あり。

「奉納普蔵院三寶大荒神前常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州犬居瑞雲院随從中寄附」

四卷(天頭四・二cm・本文二・二・三cm・地脚一・四cm)

一折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納普蔵院三寶大荒神前常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州犬居瑞雲院随從中寄附」

五卷(天頭二・四cm・界高二・二・四cm・地脚一・九cm)

一折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納普蔵院三寶大荒神前常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州大居瑞雲院隨從中寄附」

六卷（天頭三・六cm・本文二二・二cm・地脚二cm）

一折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納普藏院三寶大荒神前常在」

最終折裏に以下の記載。

「遠州大居瑞雲院隨從中寄附」

七卷（天頭三・五cm・本文二二・四cm・地脚二・九cm）

一折目表から、上部に半折ごとに一文字ずつ記載あり。

「奉納普藏院三寶大荒神前常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州大居瑞雲院隨從中寄附」

八卷（天頭三・六cm・本文二二・一cm・地脚二・二cm）

一折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納普藏院三寶大荒神前常在」

背表紙見返し部分に以下の記載。

「遠州大居瑞雲院隨從中寄附」

九卷(天頭三・三 cm・本文二二・二 cm・地脚二・四 cm)

一 折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納三寶大荒神普蔵院常在遠州瑞雲院随從中寄附」

背表紙見返し部分には記載なし。

十卷(天頭三・七 cm・本文二二・二 cm・地脚一・八 cm)

一 折目表から、上部に半折ごとに二文字ずつ記載あり。

「奉納普蔵院三寶大荒神前常在遠州大居瑞雲院随從中寄附」

背表紙見返し部分には記載なし。

### E 各巻法量・折数

一卷(縦×横×高さ)二七・八 cm × 八・六 cm × 二・七 cm

五十七折

二巻(縦×横×高さ)二七・八 cm × 八・六 cm × 二・五 cm

五十七折

三巻(縦×横×高さ)二七・八 cm × 八・七 cm × 一・九 cm

四十四折

四卷…(縦×横×高さ)二七・八cm×八・七cm×二・三cm

四十八折

五卷…(縦×横×高さ)二七・八cm×八・七cm×二cm

四十七折

六卷…(縦×横×高さ)二七・八cm×八・七cm×二・八cm

六十折

七卷…(縦×横×高さ)二七・七cm×八・六cm×二・八cm

六十一折

八卷…(縦×横×高さ)二七・九cm×八・六cm×二・六cm

五十五折

九卷…(縦×横×高さ)二七・九cm×八・六cm×三・二cm

七十二折

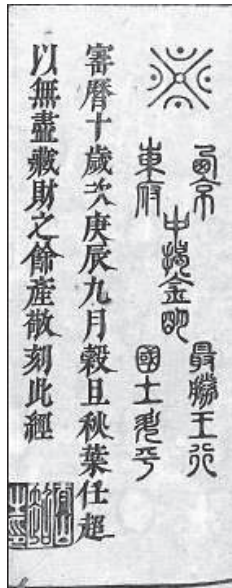
十卷・(縦×横×高さ)二七・八cm×八・六cm×三cm

六十八折

F 奥書識語

十卷の奥書には開版の契機などが書かれる。十巻卷末の識語部分は、修復の際に手順を誤ったのか、ずれて重なった状態になって保存されている。奥書識語は以下のとおりである。

図三：奥書部分



西京 最勝王咒

中嶋金明

東府 国土泰平

宝曆十歳次庚辰九月穀旦秋葉任超以無盡藏財之余産敬刻此經〔方印〕

図四：奥書部分



東海道遠之乾

〔劍花菱〕 秋葉藏版

大登山金樹林

江府寂紫居士深信金經在世刻本多矣今此版者求居士末後之改本來書写以刊行傍註訓  
 点等都除去唯取用其本文而已総陀羅尼者拠于覺彦密師之漢字本而仮名句読共一一訂  
 正之

龍頭山之麓東景老隱定水謹識〔方印〕

皇都日野殿下家臣永田氏右京齡垂古稀勲力拜書写壽稔〔方印〕

奥書の開版の契機によれば、本經は宝曆十年（二七六〇）九月に秋葉任超が刻している。奥書には「江府寂紫居士深信金經在世刻本多矣今此版者求居士末後之改本來書写以刊行傍註訓点等都除去唯取用其本文而已総陀羅尼者拠于覺彦



彦密師之漢字」とあって、本経が刻されるにあたり、原本となるような『最勝王経』が存在していたことが窺われる。文中にあらわれる江府寂紫居士とは、井伊直治のことを指す。直治は、綱吉・家宣代に二度大老職に就いた、彦根藩井伊家五代藩主であった。直該たふもり、直治、直興と、時により改名を繰り返したとされる「山上 二〇〇九」。直治は、『最勝王経』に深い崇敬を寄せていたようであり、正徳三年（一七三三）に出版された『最勝王経』の願主にもなっている。つまり『秋葉蔵版』は、正徳三年版『最勝王経』（以下、『正徳三年版』と略称）を底本に、修正を加えて刻されたものであることが把握される。また、本文は傍註訓点等を除いた『正徳三年版』を底本とするが、陀羅尼に関しては、覚彦密師、すなわち浄嚴の用いた漢字に拠よっていることがわかる。

末尾には二名の人物が名を連ねている。一人は、「龍頭山之麓東景老隱定水」とある。龍頭山とは、秋葉山の奥の院とされる山岳信仰の聖地であり、不動明王を祀っていた。東景とあるのは、秋葉寺の末寺であった東景寺のことを指す。吉田が『掛川誌稿』を引いて指摘するところによれば、東景寺を含む秋葉山の末寺は、秋葉寺の住職が隠居してから移る隠居寺であり、檀家の葬儀は行っていなかったという「吉田 一九九八」。この指摘通り、老隱定水とは、秋葉寺の元住職を示している。秋葉寺の世代一覧「野崎 一九八五」によれば、本経を刻した三十七世任超の二代前の住職が、三十五世定水瑟禪とある。つまり定水は、秋葉寺の住職を退いたのち東景寺に隠居し、任超の代に至って本経の識語に名を連ねたのである。そしてもう一人の「皇都日野殿下家臣永田氏右京」は、近世京都の文化人を集めた『平安人物志』（安永四年版）にその名がみえる。これによれば、永田右京は俗名で、永田寿稔や嶋仙子と号したようである。分類には「篆刻者」とあるので、篆刻を生業にする人物であったことが把握される。

## G 任超について

ここでは本経を刻した、瑞雲院十五世泰山任超（後に秋葉寺三十七世として転住）に焦点を当て、任超が瑞雲院に住し

た時代の事蹟と共に、秋葉山に転住したあとの行状を確認する。

任超の前住、瑞雲院十四世節山亮儀の示寂は元文四年（一七三九）とあるので、任超はそのころ、後任の住職として瑞雲院に入ったと推測される。任超は学僧と名高く、瑞雲院においても手腕を発揮し伽藍整備に努めていた。神谷によれば、任超が手掛けた伽藍整備の筆頭として、山門の建立が挙げられるという「神谷 二〇〇三」。瑞雲院の山門は、長きにわたって浄財を集め、寛延三年（一七五〇）に建立された。この山門は、高欄付き二層建て、朱塗りで、春野町文化財として現存している。そのほかにも、秋葉山への参詣道の途中にあった瑞雲坂の手前に、石仏を建立したことも記録されている。『静岡県歴史の道秋葉街道』によれば、この尊像は、智拳印を結ぶ金剛界大日如来で、宝暦二年（一七五二）に建立されたものである。同書には、蓮華座表面の刻銘が記録されており、これによれば、「願主現秋葉寺□世任超叟宝暦二壬申十二月吉日」とあるという「静岡県教育委員会文化課編 一九九六、六十二頁」。これをみると、宝暦二年には任超が秋葉寺の住職になっていたことが確認できるが、秋葉寺の世代では任超は三十七世と記録されており、三十八世ではないため若干の疑問も残る。いずれにしても、任超が瑞雲院において伽藍整備に努めたことと、宝暦二年までに秋葉寺に移ったことが把握される。

なお、任超が秋葉寺に転住したのは、高い学徳を買われたことによるといい、秋葉寺においてもその辣腕を振るった。任超が住職をしていたころ、秋葉信仰も全国的に拡大、隆盛を迎える時期であった。秋葉寺の積極的な動きをみれば、任超が秋葉信仰の隆盛に果たした影響は決して小さくない。藍谷によれば、任超の前住は三十六世逆外了順で、宝暦元年（一七五二）九月二五日に示寂しているから、先に見た通り、任超は宝暦二年（一七五二）までに、秋葉寺に入っていたとみてよい「藍谷 一九九六」。瑞雲院の過去帳によれば「神谷 二〇〇三」、任超の示寂は安永六年（一七七七）十一月であると考えられるから、二十年余りにわたって秋葉寺の住職を務めていたものと思われる。その後任の三十八世義孝任梁は、任超の法弟であり、秋葉寺の後任を決めるにあたっては任超の影響があったものと推測される。ちなみ

に任梁は、寛政十年（一七九八）に示寂している。

三十六世了順から三十八世任梁の間で、秋葉信仰は著しく隆盛するが、この点に関して、宝暦く安永期の秋葉寺の動きを簡単に追ってみる。秋葉信仰は、貞享二年（一六八五）に起こった、東海道筋の村々で秋葉の神輿を村送りするという、いわゆる秋葉祭をきっかけとして、その知名度を大幅に引き上げた。それまでは、少なくとも全国各地に普く知られるような信仰ではなかったとみられる。貞享二年より後は、徐々にその信仰圏を拡大していくようになるが、特に、近世中後期での秋葉信仰の拡大は著しい。元文五年（一七四〇）から寛延三年（一七五〇）ごろ、秋葉寺は他寺の秋葉権現の開帳に関し、たびたび訴訟を起こして中止させている。『秋葉山略縁起』〈享保二年（一七一七）のあとがきには、秋葉の名を勝手に名乗る寺社が近頃多くあるとし、秋葉山はこのようなことは許可していない旨を記している。いくつかの寺社は、秋葉信仰を保持する個別の地方寺院としてすでに信仰圏を有していたが、その上で、このようなあとがきを書いていることから、享保期には明らかに秋葉寺の力が増大していることが把握される。

以上のような流れを任超はひきついでと考えられるが、任超の代で最も秋葉信仰の拡大に寄与したと考えられる事績は、宝暦六年（一七五六）の江戸宿坊の建立であろう。この宿坊は、祈禱札を幕府や武家屋敷に献上する役割を果たしたが、特に重要なのは、この宿坊が秋葉山の配札などの活動拠点となったことである。近世後期の秋葉山は、秋葉山から信州を抜け甲州道中に至るルートを基本として、これと接続する街道を使用して配札活動を行っていた。<sup>③</sup>この中で、江戸の秋葉山宿坊は活動の中継点となっていた。つまり、秋葉山の関係者は、信者への配札活動を行う中で、江戸の宿坊と遠州秋葉山を行き来していたのである。江戸の宿坊は、明らかに遠州秋葉山の重要な拠点としての機能を果たしており、配札活動などの日常的な布教活動に、極めて有用な変化をもたらしたといえる。任超は、この江戸秋葉山宿坊を建立したのち、宝暦十年（一七六〇）に『秋葉蔵版』を刻している。

ほかにも文化的な部分では、宝暦十一年（一七六一）に「秋葉権現廻船語」初演が行われたが、これは、秋葉信仰が

歌舞伎のテーマとなるほど、全国的に人口に膾炙したことの証左ともいえよう。また、任超没後すぐ、安永九年（一七八〇）六月には秋葉山が朝廷の勅願所となることにも成功している。そして、その四年後の天明四年（一七八四）には、京都にも秋葉山の里坊を建立した。ここにおいて、幕府・朝廷に認められ、江戸・京都に秋葉山の拠点を置いたことは、任超と後住の任梁の代になしえた非常に大きな事績といえる。また、任超についての特筆すべきものとして、遠州の文化人、内山真龍との関係が深いことも指摘されている。真龍は、賀茂真淵の門人として著名であり、遠州の代表的な地誌『遠江国風土記伝』を残したことで知られる。真龍は、任超没後の寛政十一年（一七九九）に行われた二十三回忌法要にも出席し、任超に対しての漢詩と和歌を残していることから、生前に深い交流があったものと考えられる。

## H 収納箱

本経は専用の収納箱に、十巻が五巻ずつ分割されて収められている。収納箱（縦三一・三cm×横二二・七cm×高さ二二・三cm）の材質は桧地で、紅柄色漆塗り、ケンドン式、中に仕切りがある。また、箱の表面に「金光明最勝王經 全」とある。八角形の紙が貼り付けてあり、朱字で「亭」と書かれる。裏面には

奉納三寶大荒神前

遠州犬居瑞雲院

寄附

隨從中

文政三庚辰年

七月大吉旦

とある。

## I 版元

版元は『享保以後江戸出版書目改訂版』によると「宝曆十辰秋 最勝王経折本 全十冊 高島外栄 版元売出山崎金兵衛」〔朝倉・大和 二〇〇三、一二六頁〕とある。山崎金兵衛は版元として、宝曆十年十二月に『最勝王経』の写本を、翌十一年には『最勝王経略縁紀』ならびに『最勝王経』折本全十冊を出版しており、金光明最勝王経の流布に一役買っている。特に『最勝王経』写本十冊は、願人も山崎金兵衛である。このことから山崎金兵衛自身も、金光明最勝王経への強い信仰を持っていたことが窺われる。

## J 奉納元、瑞雲院について

ここでは、總持寺五院の内、普蔵院の鎮守である三宝荒神の神前に金光明最勝王経を奉納した瑞雲院について述べる。瑞雲院に関しては小沢『秋葉山瑞雲院の沿革』や神谷『秋葉山瑞雲院五百年史』といった、まとまった寺史があるため、主にこれらを用いて瑞雲院についての概要と、創建から近代までの沿革を簡単に述べる。

秋葉山瑞雲院は行基による草創であるとされるが、その真偽は定かでない、伝承の域をでない。しかし、曹洞宗寺院としての瑞雲院の歴史は比較的明確である。曹洞宗寺院としての瑞雲院の中興開山は、周智郡旧飯田村の崇信寺四世・賢窓常俊である。この法系は、二世代遡れば如仲天間に至る。如仲天間は、崇信寺の開山であるだけでなく、森町橘谷山大洞院の開山でもある。大洞院は、東海地方での曹洞宗の展開において拠点となった寺院であり、現在でも

その偉容を残している。また大洞院は、總持寺五院の内、普藏院の末寺であり、その勢力は東海地方において極めて大なるものがあつた。大洞院自体も、多くの末寺の中から輪番で住職が任命される輪番住持制をとっており、瑞雲院もそのシステムに組み込まれていた。この流れをもつて、瑞雲院は、總持寺や五院とも関係してくるのであるが、詳しくは次節にて述べる。

なお、瑞雲院は山号を秋葉山としており、秋葉信仰と接点がある。そもそも、瑞雲院の山号を秋葉山とする背景には、興味深い伝承がある。野崎によれば、秋葉山が曹洞宗に転宗する際、対立する修験方との争いのさなか、修験方に、秋葉山が曹洞宗の宗旨によるならば寺には韋駄天尊像があるはずであるからそれを見せるよう迫られた。そこで秋葉山は、麓に位置していた瑞雲院から韋駄天像を借り受けて難を逃れ、これと引き換えに、瑞雲院に秋葉山の山号の使用を許し、以降、瑞雲院はこの山号を用いているという「野崎 一九八五」。あくまでこれは伝承に過ぎないが、『秋葉藏版』を刻した任超が瑞雲院から秋葉山に転住していることや、単純な立地条件を見ても、秋葉信仰との深いかかわりは疑いない。

次に、瑞雲院の沿革を簡単に述べる。瑞雲院は当初、真言宗寺院であり、随雲寺という名であつたとされ、現在の瑞雲院とは異なる場所に建っていた。それを常俊が曹洞宗に転換したのが、寺記に拠れば延徳四年四月（一四九二）であるという「神谷 二〇〇三」。開基は、地元の領主であつた大居城主七代目の天野景顕である。小沢は、十六基の天野氏に關係する墓石が、当時の瑞雲寺の境内裏に残されていたことを挙げ、瑞雲院中興以前より、この寺院が天野氏の庇護を受けていたことは紛れもない事実であるとしている「小沢 一九八九」。

瑞雲院が曹洞宗寺院として新たな歴史を刻み始めたころ、時代は群雄割拠の戦国の世であり、瑞雲院も天野氏と徳川氏の争いに巻き込まれ、天正三年（一五七五）、戦火に焼かれたが、その後、慶長年間に再建された。瑞雲院の歴代住職は活発な布教を行っていたようであり、その甲斐あつて多くの末寺を抱えるようになっていった。例を挙げれば、

第五世白州舜珪は、瑞雲院焼失の時代にあつて、長命寺・端伝寺・高松寺・隨信庵・法幢庵を開いた。また六世泰州山易、七世獄鳥寅鷲、八世悉山順達もそれぞれ末寺を開いている。神谷によると、万治二年（一六五九）に書かれた『崇信寺末寺調上』に、瑞雲院の末寺も記載されているという「神谷 二〇〇三」。これによれば、瑞雲院八世悉山順達の代までに、実に三十八もの末寺が建立されたことが記録されている。その後の住職たちも、現在の静岡県浜松市天竜区春野町域を中心として、天竜川筋の中流に寺院を創建、あるいは復興している。総じて瑞雲院の住職たちは、精力的な布教を行うことが特徴であつたといえよう。

第十二世授峯國傳は、植田にあつた草庵を發展させ、宝泉寺を開いた。また、國傳の代には、瑞雲院の本堂の建替を行つており、伽藍整備にも注力した。注目すべきは、この代に普藏院へ晋住している点である。これについても、次節で詳述する。また、『秋葉藏版』と特に深い関わりを有するのは、本経を刻したとされる瑞雲院第十五世泰山任超である。任超については先述したため、ここでは触れないが、瑞雲院の山門建立をはじめ、伽藍整備に力を注ぎ、学僧としても知られた。第十八世智外舜承の代には客殿（方丈）が建てられており、第十九世大圓孝本の代に至つて、本堂を再建、文化元年（一八〇四）に完成している。近世中後期ころの瑞雲院は大規模な伽藍整備を次々に行つており、第十九世大圓孝本は、瑞雲院史上二度目の普藏院への晋住を果たしている。また、『秋葉藏版』を普藏院に寄進したのはこの代にあたる。

その後、瑞雲院は、江戸後期には二十ヶ寺あまりに末寺を減らしていたが、明治期に廃仏毀釈の影響を受け、さらに多くの末寺が廃寺となつた。瑞雲院自体にも多くの混乱や苦難があつたものと思われるが、そのような中でも第二十五世来岳孝重は廃寺となつた秋葉寺の復興に尽力するなど、精力的な活動を行つた。第二十八世俊岳道器の代には、地元の富豪、小沢氏を檀家総代に迎え、老朽化した伽藍の改修を行つた。以上、極めて雑駁だが、瑞雲院の歴史を概観してきた。

本節では、『秋葉蔵版』の書誌情報と、これに伴う関連項目を取り上げた。次に、『秋葉蔵版』の總持寺（普蔵院）への伝来の契機について考察を行う。

### 三、「秋葉蔵版」の總持寺への伝来の契機

近世の瑞雲院は總持寺五院の内、普蔵院の輪番地となっており、このことが『秋葉蔵版』伝来の直接の要因となっている。ここではまず、輪番住持制という運営形態について、基本的な説明を施したい。そもそも總持寺は、その歴史の早い段階から、輪番住持制を敷いている。輪番住持制は、祖師が残した寺院の維持経営のため、その門弟、あるいは門下の寺院から交代で住職を選ぶ運営方法である。そして、その輪番に選ばれる資格を持つ寺院を輪番地とよぶ。總持寺は、二世峨山韶領の下に多くの優秀な弟子が集ったが、中でも太源宗真・通幻寂靈・無端祖環・大徹宗令・実峰良秀の五人は、五院（普蔵院・妙高庵・洞川庵・伝法庵・如意庵）とよばれる塔頭寺院の開基となった。五院は總持寺を護持運営する立場を保持し、やがて五院の住職が交代で總持寺の住職を務めるようになった。輪番住持制が開始されてから、總持寺住職の任期は、三年、一年、半年、三か月と徐々に短縮されたが、天正十五年（一五八七）以降、大幅な制度改革がなされた。すなわち、輪番にのぼった五人が一年間五院の住持を務め、その内七十五日間、交代で總持寺の住持を務めるようになったのである〔室峰編 一九六五〕。これに伴い五院は、これまで嗣法本位に住持職が選ばれてきたが、これ以降、輪番地を定め、寺院本位で五院に輪番することになった。五院にはそれぞれ末寺が存在し、それらは輪番地として、五院の住職を務める資格が生じたのである。なお輪番住持制は、總持寺に限られた制度ではない。例を挙げれば、相模の大雄山最乗寺、遠江の橘谷山大洞院がある。両者はそれぞれ、当該地域を中心にきわめて多くの末寺を有し、それらが輪番地として、最乗寺や大洞院に昇住したのである。

翻って、近世總持寺の運営形態を詳しく述べた『總持寺誌』によれば、瑞雲院は大洞院の輪番地であり、遠江大洞



院を拠点として東海・東北地方に多くの門末を有する如仲派の輪番地寺院として、近世期に二度、普蔵院に晋住している〔室峰編 一九六五〕。『嶽山史論』によれば、遠江大洞院や相模最乗寺などは、共に末寺から輪番で住職が選ばれる輪番住持制をとっていたため、自らが五院輪番地であるにも関わらず、五院に昇ることができなかった。故に、派頭の普蔵院や妙高庵から直請状が発せられると自らこれに受書を呈し、その後自らの門末を代住させ、法としては自らが輪番したことにしたという〔栗山 一九八〇〕。近世に大洞院の代わりとして普蔵院に輪番した寺院は、瑞雲院を含め四十三カ寺あった〔大本山總持寺 二〇一六〕。

ここで、瑞雲院の普蔵院への晋住について詳しく見てみる。『總持寺誌』によれば、瑞雲院による普蔵院への晋住の一度目は、元禄六年（一六九三）の瑞雲院十二世授峯國傳によるものである。國傳は、播磨慶徳寺・照外、出羽梵照寺・義山、撰津顯孝庵・雪忠、伊勢建福寺・天海とともに五院に晋住している。二度目の晋住は文政二年（一八一九）瑞雲院十九世大圓孝本による。孝本は、若狹常在院・孝純、出羽見竜寺・鉄円、撰津大広寺・道林、尾張興禅寺・海籌とともに五院に晋住している〔室峰編 一九六五〕。『秋葉蔵版』は、箱書きに「文政三<sup>庚</sup>辰年七月大吉旦」とあるため、孝本晋住をきっかけに三宝荒神前に供えられたことが把握される。『總持寺誌』によると、輪番地住職の五院への晋住が決まると、晋住の一年前に請状が発せられる。そして、それを受けた寺院は、八月十五日に前任の五院住職と交代する形で一年間の五院住職を務めるといふ〔室峰編 一九六五〕。なお、總持寺の住持は、五院の住職が七十五日ごとに交代する形で務められるが、總持寺の住職期間が終われば元の住職地に帰ることができるわけではなく、一年間は必ず五院の住持として務めなくてはならなかった。つまり孝本は、文政二年の八月十五日から、翌年、文政三年の八月十五日まで普蔵院の住持を務めたのである。このことから、『秋葉蔵版』が奉納された時期は、孝本が瑞雲院に帰山する直前であったことが窺われる。

瑞雲院は國傳・孝本それぞれの代に、本堂の再建を行っている。總持寺祖院に蔵される古文書を題材に、近世曹洞

宗教団の展開を分析した圭室文雄によれば、輪番として五院に晋住するためには、住職一人・伴僧二〜三人、さらに奉公人を伴って、四人から六人で生活しなくてはならず、自坊から總持寺までの往復の交通費や宿泊代、一年間の滞在にかかる費用を含めると、二〇〇両にのぼる支度金を用意しなくてはならなかったという「圭室 二〇〇八」。また圭室は、この間、自坊が留守になるため留守番役の僧を置かねばならず、相当な経済的負担があったことを指摘している。こうした部分を考慮すれば、本堂改築をはじめ、本山へ昇るための資金などを捻出するなど、瑞雲院は有力な檀家に支えられた相当財力のある寺院であったことが把握される。

次に、なぜ孝本の普蔵院への晋住にあたって、『秋葉蔵版』が三宝荒神前に奉納されたのか考えてみたい。『最勝王経』の性格を鑑みるに、まずは国難や大規模災害など、国家の乱れに対して祈願する、といったことが想定しやすい。類似するような信仰を参考にしてみる。東京都八王子市の真言宗寺院、金剛院にて『最勝王経』を一石に一字ずつ書写して埋納するという供養法が行われたことをしめす石塔の発見を報告した小島の論考がある「小島 二〇二三」。これによれば経塚は、安政二年（一八五六）に建立されたが、同年に、金剛院が『秋葉蔵版』を入手していたことがわかり、経本と一字一石経供養との関連性を見出せるという。その上で、経塚が建立された時期に着目し、経塚が国家的災難の歴史の一端に関わるものなのかはつまびらかにし得ないと断りつつも、安政の大地震や大火、黒船の来航など、社会的な内外患とも呼べる状況のなか、供養塔が建立されたことを紹介している。これは、社会的な混乱や災難といったものに対して、『最勝王経』が一定の力を発揮する（あるいは、してほしい）と考えられていたことを示す事例といえる。そもそも、『金光明経』諸本は、国家鎮護の要として古代より広く誦誦されていた經典であるから、やはり『秋葉蔵版』が總持寺に伝来した背景には、何らかの混乱や災難からの復帰・回復という願いが織り込まれているとみてよ。

以上のような視点に立つて、本経が伝来した文政二年（一八一九）、文政三年（二八二〇）の国内問題を確認してみる。

しかし、意外にもこれといった社会的な問題は起こっておらず、『秋葉蔵版』を奉納する主たる理由は、孝本が晋住した文政二年および文政三年という年代では見当たらない。だとすれば、『秋葉蔵版』を奉納した理由は別にあり、總持寺自体に何らかの問題が存在していたと考えられる。

『總持寺誌』によれば、孝本晋住の文政二年（一八一九）ごろの總持寺は、文化三年（一八〇六）正月に起きた回祿からの再建の途上であった。文化三年の回祿については納富「江戸末期における總持寺の実情（一）——文化三年の火災と再建を中心として——」に詳しい。これによれば、文化三年正月二十一日の暁天頃、如意庵客殿真前より出火し、普蔵院・洞川庵庫裡・土蔵・白山宮本社・十王堂・芳春院・塔司十九ヶ寺を除き、主な堂舎十七棟を焼失したという「納富 二〇〇四」。その中であって、瑩山・峨山の御両尊像や仏殿三尊などの主要な尊像は持ち出すことができ、山内寺方に保管した。しばらくの後、普蔵院を本山客殿（大祖堂）として御両尊像をはじめ各尊像を安置し、總持寺の勅額を掛け置いた。仏殿も焼失してしまったため、洞川庵へ釈迦三尊を移し、仏殿の代わりとするなど、臨時体制の構築が早急に行われた。その後は、大般若転読をはじめとした日々の勤行や転僧式などを懈怠なく行いつつ、再建に向けての勸化の申請をしている。

興味深いのは、文化五年に、なかなか許可が下りない勸化の申請が通り本山再建が無事成就するよう種々の祈願が行われている点である。例を挙げれば、一石一字法華經書写、大悲神呪壹万余遍諷誦、高雄山壹万度參詣、荒神尊への心經壹万余遍諷誦などであり、本山再建に向けて、様々な形で熱烈な祈願が行われていたことが看取される。翌文化六年には念願の勸化願が幕府に聞き届けられ、本格的な再建が進んでいく。この最中、再建された本山客殿（大祖堂）が洪水による山崩れの影響で大破した。この当時の状況は「總持寺代官星野守善覺書（抄）」によると、

「文化十四丁丑年六月七日大洪水、本山客殿後口山押たをし山崩レ大変、客殿軒廻り柱折レ、御両尊・高德院殿尊

像者普蔵院ニ奉遷、是ハ不審なる哉、去戌年柱立規式ニ四神柱書方相違、崇りニも候哉、人口ハ喧敷、棟梁大工我意募り、新堂破却与成ル歟」

〔門前町史編さん委員会 二〇〇四、一五二頁〕

とあり、このような不審な状況に陥ったのは、柱の立て方が規式に則っていなかったため、崇りがあったのではないかと人々が噂したことが記されている。その後、文政二年（一八一九）に本山客殿（大祖堂）の再々建が無事なされた。ちょうど孝本が普蔵院に晋住したのは、大破した本山客殿（大祖堂）の再々建がなされた時期と重なることは注目してよ。

これらの事象を勘案すると、『秋葉蔵版』が普蔵院、三宝荒神の神前に供えられた背景には、本経が、瑞雲院の十世を務めた泰山任超が刻した、瑞雲院ゆかりの経本であったことはもちろんのこと、さらに想像をたくましくすれば、孝本晋住の際に大破した大祖堂が再建されたことが直接の理由であったのではないかと推測される。つまり、文化三年に起こった火災からの再建の途上である總持寺において、『最勝王経』という除災招福を旨とする靈験あらたかな経本を普蔵院の鎮守である三宝荒神に供えることで、突発的な災害によって再建された堂宇が大破するといった事態が何度も起きないように、總持寺再建の無事成就を祈念したのではないかと考えられるのである。事実、總持寺再建にあたっては、様々な祈願が熱心に行われたことや、再建された客殿（大祖堂）が大破した際、建方の規式に則っていないことで崇られたのではないか、という不安があったことを鑑みても、『最勝王経』の奉納に切実な思いが込められていたことが看取される。

つぎには視点を換え、本経の生まれる要因の一つとなった秋葉信仰との関係を考えてみたい。

#### 四、『金光明最勝王経』と秋葉信仰

そもそも、任超が『最勝王経』を『秋葉蔵版』として開版しようと考えた背景には、いかなる理由があるのだろうか。これを詳らかにすることは難しく、秋葉山における『最勝王経』の受容がいつごろから見られるのかは定かではない。<sup>(4)</sup>しかし、各種資料を眺める限り、遠州を発祥とする井伊家とのつながりから『最勝王経』に焦点が当たっていることは疑いない。

安永六年（一七七七）に発行された『正一位秋葉山大権現略縁記』の後半部には、以下のように秋葉山の銅鳥居についての記述がある。

一、神前銅鳥居 近江彦根城主  
井伊掃部頭直孝建立

秋葉正一位大権現額

（中略）

一、犬居坂下へ五十丁

銅鳥居 井伊掃部頭直孝建立

再建立有井伊直治と有之

町石朱 ニ而 金字有 右同断

金光明最勝玉経流布檀主井伊直治

一ヶ年 ニ 二百部宛之秋葉山より出上卷 ニ あり

〔田村 一九九八、二七七、二七九頁〕

図五：筆者蔵近世秋葉山の案内図（一部拡大）



これによれば、秋葉山神前の銅鳥居は、井伊直孝（一五九〇—一五六九）によって建立されたところ。そして、参道に位置した銅鳥居は、同じく直孝によって建立されたものを直治が再建したことが刻まれている。井伊直治は、先述したように彦根藩井伊家五代藩主であり、直孝の孫にあたる。直治は、生涯で二度大老職に就いたが、再任の時期は正徳元年（一七一二）二月であった。これをきっかけとして直治は、同年八月に『最勝王経』の願主となっている。その後、直治が願主となった『最勝王経』は正徳三年（一七二三）に出版されている。この『正徳三年版』は、『秋葉蔵版』の底本になったと考えられる経本である。また、寛政二年（一七九〇）に出版された『金光明最勝王経畧縁起供養行軌』には、願主が直治であることと、守護を祈る尊格として正了知大将、白井権現と並んで秋葉権現の名が列記されていることが見いだされる。

これらのことから、直治が『最勝王経』に深い信仰を寄せており、井伊家と秋葉信仰がかかわっていたことが把握される。かつて秋葉山にはいくつかの鳥居があり、その内、一の鳥居は、正徳四年（一七一四）六月一日に第七代彦根藩主井伊直惟が建立したとされる<sup>⑤</sup>。その表額には「金明嶺」とあり裏には「金光明大法輪」と記されていた。実際に、近世期に刷られた秋葉山の案内図には、最も麓側に近い一の鳥居には「金明嶺」、中腹の二の鳥居には「護国嶺」、寺側に最も近い三の鳥居には「最勝関」と記されている（図五）。鳥居に示される文言を見ると、近世中期頃の秋葉山は明らかに、『最勝

王経』とこれに基づく護国思想を前面に押し出していることが見て取れる。その鳥居の多くは井伊家が建立している点から、秋葉山側も井伊家とのつながりの上で、『最勝王経』を前面に押し出すようになったのではないかと考えられる。こうした下地があつて、任超は『秋葉蔵版』の開版に乗り出したものと思われる。さらに、『最勝王経』に基づく護国思想を押し出すことは、任超や後任の任梁の代において、朝廷の勅願所という公認の立場を得るのに有利であつたと考えられ、任超が『秋葉蔵版』を刻した裏側には、以上のような理由があつたと推察される。

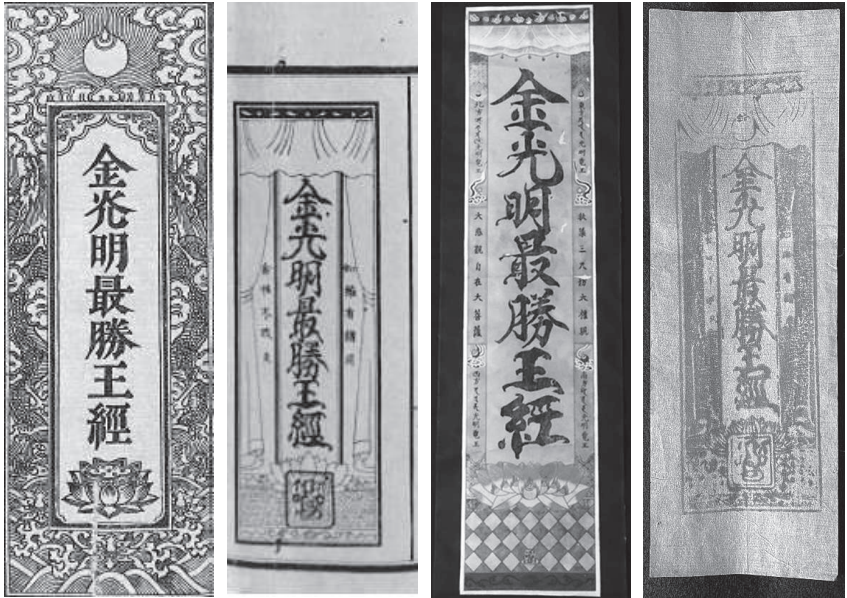
これまでみてきたように、秋葉山は『最勝王経』と深いかわりを有したが、このことは、実際の秋葉山の布教展開にも作用し、信者に配布した御札などにも影響が見られる。次に、具体的な例を提示しつつ、『最勝王経』に関わる近世秋葉信仰の実相に迫りたい。

##### 五、『最勝王経』と秋葉信仰の諸相

秋葉信仰と『最勝王経』のかかわりを明確に示すものの中に、近世期に信者に頒布された授与品がある。近世秋葉山が作成していた御札は、『奉祈念秋葉三尺坊守護所』と刷られたものや、三尺坊の姿をかたどつたものが一般的である。その中であつて、同じように数多く刷られた御札の中に、『最勝王経』の題目を用いたものがある(図六)。この題目の意匠は、『正徳三年版』に収録されるものとはほぼ同様で、意外にも『秋葉蔵版』に収録される題目の意匠を用いていない。このことから、おそらく秋葉山は、『秋葉蔵版』を刻する以前から、井伊家とのつながりを基に『正徳三年版』を受容していたため、御札の意匠にこれを用いたとみることができるといえる。

これとほぼ同様の字体および意匠を用いたものに、近世期の掛軸がある(図六-2)。この掛軸の軸装は後補と思われるが、半切部分は近世期のもので推測される。特に興味深いのは、題目の両脇に記される文言で、右側には「秋葉三尺坊大権現」とあり、秋葉信仰と『最勝王経』のつながりを直接的に示した刷物であることが明らかである。このよ

図六: 右より1〈近世秋葉山の御札(筆者蔵)〉 2〈近世の掛軸(筆者蔵)〉  
3〈「正徳三年版」の挿絵(金剛院蔵)〉 4〈「秋葉藏版」の挿絵(總持寺祖院蔵)〉



うにみると、信者に頒布した授与品の中には、『最勝王経』を意匠として用いたものがあり、しかもバリエーションがあったことが看取される。また別の角度から指摘をすれば、これらの例は、秋葉山が信者に頒布していた御札等の威力の根源が『最勝王経』に拠っていたことを示している。これらの点から、秋葉山が『最勝王経』を重視していたことは疑いないだろう。

事実、近世の人々には、秋葉信仰が『最勝王経』と強いつながりを有すると考えられていたらしい。江戸浅草寺の塔頭の一つであった正福院という天台宗寺院が近世後期に発行した『秋葉大権現・千勝大明神畧縁起』という略縁起がある。この略縁起は、安政〜慶応年間(一八五四〜一八六八)に発行されたと推測されるが、本縁起内では、秋葉権現をさして「金光明最勝王経法華経ノ守護神ナリ 是衆人ノ知ル所ニシテ茲ニ贅スベカラズ」と記している[拙稿 二〇二〇]。この記述から、少なくとも近世後期の江戸において、秋葉権



現は『最勝王経』と『法華経』の守護神であるという構図が、一般的に受け入れられていたことが見て取れる。<sup>⑦</sup>

なお、秋葉寺に祀られていた秋葉三尺坊権現は、近代以降、秋葉寺が廃寺となることに伴って、本寺である可睡斎に移された。これにより可睡斎は、秋葉三尺坊権現を奉祀する「秋葉総本殿」を称している。可睡斎の日々の勤行にも、「金光明最勝王経」の題目および「金勝陀羅尼」が唱えられており、ここにも、近世期から存在する『最勝王経』と秋葉信仰のつながりの残滓が見いだされる。

## 六、小結と今後の展望

本稿では主に、總持寺祖院蔵『秋葉蔵版』について、書誌情報を詳細に整理しつつ、近世總持寺五院の内、普蔵院に本経が奉納された背景を考察した。また本経が秋葉蔵版であったことに因み、近世秋葉信仰と『最勝王経』のかかわりを述べてきた。ここでは小結として、簡単なまとめを行い、今後の展望を示してみたい。

文政三年（一八二〇）七月、近世總持寺を中心的に運営してきた五院の内、普蔵院の鎮守である三宝荒神の神前に『秋葉蔵版』が奉納された。奉納元は遠州瑞雲院である。瑞雲院は、遠州大洞院の輪番地としての性格を持ち、故に大洞院の代わりとして、普蔵院に晋住することができた。『秋葉蔵版』の奉納は、瑞雲院第十九世、大圓孝本が普蔵院に晋住したことが直接の契機となっている。孝本晋住時、總持寺は文化三年（一八〇六）の火災からの再建を目指す途上であり、再建途中の客殿（大祖堂）の大破と、これに伴う客殿の再々建がなされた時期にあった。このことから、瑞雲院が『秋葉蔵版』を奉納した背景には、本経が瑞雲院の歴代住職の中でもとりわけ優れた学僧として知られた、十五世任超が刻した経本であったことと、總持寺の再建が恙無く進み、總持寺が安寧を取り戻すことを祈念する意味があったものと推測される。

また、本経が秋葉蔵版であることから、近世に流行した秋葉信仰とのかかわりも眺めてみる。すると、秋葉信仰と

『最勝王經』の關係には、遠州を祖地とする井伊家の存在が大きな影響を与えていることが指摘できる。『秋葉藏版』を刻した任超は、瑞雲院から秋葉山へ転住した人物であり、任超の在山した期間に、秋葉山は幕府や朝廷との距離を縮めることに成功している。特に『秋葉藏版』が刻される以前より、秋葉山は幕府の祈願所として、祈禱札を納めるために江戸に秋葉山の宿坊を建立するなど、その積極的な展開は著しかった。このような流れの中で、任超が『秋葉藏版』を刻した背景には、秋葉山を「金光明最勝王經の山」とし、井伊家とのつながりを保ちつつ、護国思想を押し出すことで朝廷への存在感を高める意図があったのではないかと思われる。その甲斐もあってか、秋葉山はその後、朝廷の祈願所としての立場を手にすることに成功している。

ただし秋葉信仰においては、このような思想的な部分ではない、現実的な信仰世界にも『最勝王經』の影響が強くみられる。例を挙げれば、御札などの信者への授与品の中に、『最勝王經』の題目をあしらったものがある。経本自体が御札の威力の源泉となっていることは、秋葉信仰における『最勝王經』の重要性を物語るものといえよう。以上、總持寺祖院での『秋葉藏版』の披見を基に、近世總持寺や秋葉信仰といった諸分野とのかかわりを各論的に述べてきたが、最後に今後の展望を示したい。

本稿は、總持寺や秋葉信仰が『秋葉藏版』とどうかかわったかが大きなテーマであったが、さらに視角を拡げれば、總持寺と秋葉信仰に何らかの關係性があつたのかという疑問に突き当たる。より直接的な言い方をすれば、曹洞宗の本山である總持寺が、民間信仰的な色彩をどの程度持っていたかという疑問である。佃は『能登總持寺』のなかで、以下のように記している。

「現在鬼屋部落の中央にある秋葉社も、元は總持寺の寺領である「三尺坊」の地にあつた。(中略)なお、秋葉社のあつた「三尺坊」には、今でも坊跡と社地跡が残されていることから考えて、秋葉山系の「三尺坊」という山

伏が、中世ここに「秋葉大権現」を勧請してきて、秋葉社と三尺坊を建てて住んでいたと思われる。」「佃 一九七四、四六頁」

中世に秋葉権現が勧請された、という部分には頷きかねるものがあるが、佃のこの指摘によれば、總持寺に秋葉信仰が息づいていたことが把握される。これ以上のことは残念ながら本稿では詳らかにはし得ないが、曹洞宗の中に息づく民間信仰的な色彩は、本山たる總持寺にも当然見いだせる。これまでの曹洞宗にかかわる研究では、こうした部分は積極的に触れられてこなかったきらいがあり、研究の余地は大いにあると考えられる。今後は、曹洞宗門や總持寺が、秋葉信仰をはじめとする、民間信仰的な要素を多分に含む宗教形態をいかに受容してきたか、という点をより深く掘り下げていきたい。

#### 参考文献・参考ホームページ

- 横関了胤 『江戸時代 洞門政要』 東洋書院 一九三八
- 室峰梅逸編 『總持寺誌』 大本山総持寺 一九六五
- 佃和雄 『能登総持寺』 北国出版社 一九七四
- 金岡秀友 『金光明経の研究』 大東出版 一九八〇
- 栗山泰音 『覆刻 嶽山史論』 曹洞宗大本山總持寺 一九八〇
- 野崎正幸 『秋葉山三尺坊大権現 火防天狗のふる里』 島津書房 一九八五
- 小沢舜次 『秋葉山瑞雲院の沿革』 春野文化郷土研究会 一九八九

- 朝倉治彦・大和博幸編 『享保以後江戸出版書目改訂版』 臨川書店 一九九三
- 藍谷俊雄 『秋葉信仰の根本 三尺坊』 村田書店 一九九六
- 静岡県教育委員会文化課編 『静岡県歴史の道秋葉街道』 一九九六
- 田村貞雄監修 『秋葉信仰』 雄山閣 一九九八
- 神谷昌志 『秋葉山瑞雲院五百年史』 羽衣出版 二〇〇三
- 納富常天 「江戸末期における總持寺の実情(二)——文化三年の火災と再建を中心として——」 『鶴見大学佛教学  
化研究所紀要』第九号 二〇〇四所収)
- 門前町史編さん委員会 『新修門前町史資料編2 總持寺』二〇〇四
- 圭室文雄 『總持寺祖院古文書を読み解く——近世曹洞宗教団の展開——』 曹洞宗宗務庁 二〇〇八
- 山上降太 『元禄・正徳期の御大老 井伊直興と直該』 郁朋社 二〇〇九
- 小島裕子 「一字一石経の信仰にふれる——安政二年建立の金光明最勝王経塔に遇して——」 『法華』一〇五六号  
法華会 二〇一三所収)
- 佐伯俊源 「金光明最勝王経の思想と流伝」(『国宝西大寺本金光明最勝王経 天平宝字六年百濟豊虫願経卷六く卷十』  
総本山西大寺 勉誠出版 二〇一三所収)
- 田村貞雄 『秋葉信仰の新研究』 岩田書院 二〇一四
- 野沢佳美 『印刷漢文大蔵経の歴史——中国・高麗篇——』(シリーズ・アトラクシア vol.3) 立正大学図書館 二〇  
一五
- 大本山總持寺 『曹洞宗大本山總持寺五院輪住帳』 二〇一六
- 武井慎悟 『秋葉大権現 千勝大明神畧縁起』 翻刻とその周辺」(『仏教学研究会年報』 第五十三号 二〇二〇所収)

武井慎悟 「近世後期武蔵国・相模国における秋葉信仰の展開とその周辺」(『駒澤大学仏教学部論集』五十一号 二〇二〇所収)

『平安人物志』 [https://lapis.nichibun.ac.jp/Heian/years\\_ane14/heian68.html](https://lapis.nichibun.ac.jp/Heian/years_ane14/heian68.html) 最終閲覧：二〇二〇年十一月十六日

## 注

(1) 類似するものに、中国・明代の永楽南蔵にみられる「宝尽」がある。野沢によれば、「宝尽」とは、如意宝珠や打ち出の小槌、軍配などを模様化した吉祥文様の一つであるという〔野沢 二〇一五〕。本稿で扱う『最勝王経』との関わりは直ちには見いだせないが、経本の余白にみられる文様という共通点から、ここで触れておく。

(2) なお、『正徳三年版』及び井伊直治、浄厳については、小島裕子「江戸期正徳版『金光明最勝王経』とその信仰——井伊直治願経、訓読、浄厳の陀羅尼梵音のことなど」(本紀要所収)に詳しい。

(3) 拙稿「近世後期武蔵国・相模国における秋葉信仰の展開とその周辺」(『駒澤大学仏教学部論集』第五十一号所収)に詳述した。

(4) 秋葉山にほど近く、光明山光明寺という曹洞宗寺院がある。その名から、この寺院も金光明最勝王経と何らかの関係があることが察せられる。秋葉山との関係性について不明な点が多く、本稿では立ち入らないが、今後の課題とすべく言及しておく。

(5) 秋葉山参道に点在する案内文による。

(6) 白狐に乗った烏天狗の姿。

(7) また、民間において、秋葉信仰と『最勝王経』のつながりが受容されていたことを直ちに見いだせる事例で

はないが、筆者が蔵する近世期の文書に、秋葉権現を祀る地方寺院が護摩供を行う際、放生会を行った記録がある。放生会は『最勝王経』内の「長者子流水品第二十五」を典拠の一つとして行われてきた歴史があり、そういった点を鑑みれば、この例は示唆に富むものであると付言しておきたい。

〈謝辞〉このたび、調査・閲覧の御許可を賜った大本山總持寺祖院、ならびに慈高山金剛院主山田一眞師に、心より感謝申し上げます。

（たけい しんご・鶴見大学仏教文化研究所特任研究員）